令和八年度　羽島市社会人権教育推進事業

「人権作文コンクール」

優秀作品集

令和８年度 羽島市社会人権教育推進事業

「人権作文コンクール」優秀作品集

私たちは、幸せで明るい社会で暮らしたいと願っています。また、人権侵害のない明るい社会の実現は、私たちの永遠の願いです。しかし、私たちのまわりを見ると、まだまだ保障されているはずの基本的人権が侵害され、偏見や差別に苦しんでいる人がいます。

「人権作文コンクール」は、このような社会の中で、児童・生徒一人ひとりが、今自分たちのまわりで人権に関して何が起きているのかを見つめ直し、自分たちは何をしなければならないのかをじっくりと考えてもらうために実施しました。

この作品集は、たくさんの応募作品の中から、特に優秀とされた児童・生徒の皆さんの作文を掲載したものです。子どもたちの人権に対する考えに耳を傾けていただくと共に、人権教育に関わるさまざまな場で活用していただければ幸いです。

【応募概要】

１．作文内容

日常の家庭生活や学校生活あるいはグループ活動などの中で得た体験を通じて、基本的人権を守ることの重要性、必要性について気付いたこと、考えたことなどを題材とする。題名は自由。

２．募集対象

市内の小学校、義務教育学校、特別支援学校小学部に在籍している５・６年生及び市内の中学校、義務教育学校７～９年生、特別支援学校中学部に在籍している生徒に相応する学籍または年齢にある者。

３．応募総数

６５点

（内訳）

小学５年生及び義務教育学校５年生	１２点
小学６年生及び義務教育学校６年生	２８点
中学１年生及び義務教育学校７年生	８点
中学２年生及び義務教育学校８年生	９点
中学３年生及び義務教育学校９年生	８点

４．審査員

羽島市社会人権教育推進協議会委員１１人、生涯学習課長

５．賞の授与等

最優秀賞２点、優秀賞４点、入選１４点

入賞者に表彰状と副賞を授与、最優秀賞及び優秀賞作品を人権作文集に掲載

目　次

最優秀賞
私にできること　竹鼻小学校六年　平岡　彩葉　1ページ
「普通」って何だろう　中島中学校二年　松下　ひかり　3ページ

優秀賞
あなたの人権を守るのは私。　中央中学校三年　宇野　会咲　5ページ
言葉の力　中島中学校二年　小島　心陽　7ページ
言葉の葉と向き合う　中島中学校三年　西脇　聖菜　9ページ
人権ボッチャ　桑原学園　九年　吉川　紅羽　11ページ

（敬称略）

最優秀賞

私にできること

竹鼻小学校　六年　　平岡　彩葉

アフリカの人は努力不足だ。そんなふうに思っていた。私は、今年の夏休みに「キミの一歩 アフリカ ゾウを食べるにはひと口ずつ」と言う本に出会った。この本を読む前から、アフリカは貧しくて、戦争ばかりしている国だと思っていた。

なぜこんな事になっているのか。そんな中で頑張っている人がいることにこの本で気付かされた。

私は今三つの習い事をしている。ピアノと水泳、囲碁だ。習い事をするにはお金がいる。お金がないと習い事をすることはできない。そして私は、毎日ご飯をおなかいっぱい食べている。それは私にとって「当たり前」のことだ。でも、それはどんな人にとっても、「当たり前」なのだろうか。私は、それが誰にとっても「当たり前」ではないことが分かった。

アフリカの人は貧しく、ご飯が食べられないということがあったりするため、生きていくだけで精一杯。さらに、「男女差別」という問題があり、男性は勉強しに行かせてくれるけど、女性は家で家事をしたり、中には幼い頃に裕福な男性と望まない結婚をさせられるという家もあるそうだ。そんな問題で日本のように習い事をしたり、ご飯をおなかいっぱいに食べたりといった自由でしあわせな家は少ないということを知った。つまり、日本は恵まれている、という事だ。

チェスという、アフリカの人も男女関係なく出来るゲームがある。チェスとはキングという駒を、チェックメイトというキングが逃げられない状態にした人が勝ち、というゲームだ。その中で勝つために重要な駒が二個ある。それはクイーンとポーンだ。クイーンは縦、横、斜め、全ての方向に行ける、最強の駒だ。しかし、ポーンは最初以外一マスしか進めない、「消耗品」のように使われていて一番弱いと思われている駒だ。でも、ポーンのすごいところは、一番奥のマスまで進むと、クイーンになるということだ。つまり、一番弱い駒だったとしても、諦めずに頑張れば最後には、最強のクイーンになれるということだ。

私が見ているいつもの「当たり前」は誰にとっても同じとは限らない。地球の外から見ると不平等だ。そう考えると最近、日本でも問題になってきているフードロスや環境問題についても考えさせられる。そして、この世界の中には、私が感じたことのないような不自由な状況にある人がいることを忘れないように、毎日努力をして、私の「一歩」を進んでいきたい。私は、「今、自分ができている生活」をありがたいと感じた。

私が読んだ本の表紙には、チェスボードの前にアフリカの女性をイメージした人物が描かれている。彼女の手には、少し光ったポーンが握られている。私には女性の手には希望が握られているように感じた。どんなに弱くても、大変

でも、「一歩」を踏み出していけば絶対に、クイーンのような最強の存在になれると思った。だから、私もそんな「一歩」を踏み出していきたい。

「普通」って何だろう

中島中学校　二年　　松下　ひかり

みなさんは、「普通の兄弟」と聞いて、どんな兄弟を思い浮かべますか。多くの人が、仲良く話したり、一緒に遊んだり、ときには喧嘩もする、そんな兄弟を思い浮かべるでしょう。私にも二つ下の弟がいます。ですが、私たち兄弟は少し違います。弟には、自閉症と重度の知的障害があり、言葉で会話することが難しいからです。

私のように障害を持つ兄弟姉妹がいる人のことを、世間では「きょうだい児」と呼ぶそうです。小さい頃、その言葉を知った私はなんだかうれしくなりました。兄弟のことで悩んでいるのは私だけではないのだと思えたからです。

私の周りには、弟のような障害のある兄弟姉妹がいる友達はいませんでした。なので、「どうして私だけ違うんだろう」と不安になることもありました。友達が兄弟と喧嘩して愚痴を言っているのを聞くと、私は少し返事に困ってしまいます。弟とは言葉で会話をするのが難しいため、十年間一緒に過ごしてきた今でも、喧嘩は片手で数えるほどしかしたことがないです。でも、喧嘩はしなくても、寂しい思いや恥ずかしい思いはたくさんしてきました。外で弟が大きな声を出したり、周りとは違う行動をすると周りの人からじっと見られることがありました。小さい頃の私は、その視線がとても冷たく感じてすごく嫌でした。幼かった私は、「どうして弟は普通じゃないんだろう」「普通の兄弟だったら良かったのに」と思ってしまうこともありました。

しかし、弟とともに成長してきた今、私は「普通の兄弟」とは何なのだろうと考えるようになりました。

「普通の兄弟」なんて、本当にあるのでしょうか。兄弟の関係は家庭によってさまざまで、仲が良い兄弟もいればよく喧嘩をする兄弟もいるし、よく話す兄弟もいればあまり会話をしない兄弟もいます。どれもその家庭にとってはそれが当たり前で、比べるものではないこと、兄弟のかたちに「普通」や「正解」なんてないのだということに気づきました。私は前まで、弟と周りの兄弟を比べて、勝手に「普通」を作り出していました。しかし、言葉で会話をすることは難しくても、弟には弟なりの優しさや愛情表現があり、頭をなでたら喜んでくれたり、お菓子をはんぶんこして私にわけてくれたりもします。そのたびに、これが私にとっての幸せで、「普通」という言葉では家族のかたちは表せないのだと実感します。

弟がいたからこそ、私は「普通」という言葉にとらわれない考え方を学び、他の人にはなかなかできない経験をすることができました。そこで一人一人に得意なことや苦手なことがあること、見た目だけでは分からない困りごとがあることを知ることもできました。

弟との生活は、私の考え方だけでなく、行動にも影響を与えています。中学校の職場体験では、私は障害のある子どもたちを支援する施設を第一希望と第二希望に選びました。周りの友達は飲食店などを希望する人が多かったですが私は職場体験という貴重な機会だからこそ、弟との生

活を通して身近に感じてきた福祉の仕事について学びたいと思ったからです。

また、弟が通うデイサービスの方に仕事についてインタビューをしたことがあります。その中で特に印象に残ったのは、「子どもたちの意思を尊重し、大人の都合を子どもたちに押し付けないようにすることを大切にしている」という言葉でした。また、「障害のある人への認識は変わってきているものの、まだ偏見が残っているのも事実であり、そこで苦しむこともある。しかし、利用する子どもたちと触れ合い、自分たちが提供する活動で子どもたちが笑顔になってくれると、自分たちもとても救われた気持ちになる。」というお話もしてくださいました。その話を聞いて、私は人権とは一人一人の違いを認め、その人らしく生きられるように寄り添うことなのだと改めて感じました。そして、その考えは弟との生活を通して私が学んできたことと重なり、とても心に残りました。

このように、弟を通してさまざまな人と出会い、多くのことを学びました。これらの経験は、視野を広げ、人を見た目や周りとの違いだけで判断しないことの大切さを教えてくれました。

私は今、弟がいることをとても誇りに思っています。昔は「普通の兄弟だったら」と願っていた私ですが、今なら「普通の兄弟なんてない」と胸を張って言うことができます。これからも、「普通」という言葉で誰かを比べるのではなく、一人一人の違いを個性として認め、その人らしさを大切にできる人でありたいです。

優秀賞

あなたの人権を守るのは私。

中央中学校 三年　宇野　会咲

私のそばには、常に笑顔でみんなに優しいAさんがいました。しかし、Aさんは、他の生徒にいじめられていました。理由は分かりませんが、その子に聞こえるように悪口を言ったり、Aさんのものを汚物扱いしたりといった感じです。初めは、Aさんが傷ついていないか心配で声をかけたりもしました。しかし、

「大丈夫！自分はあんなの気にしないから。」と言うものですから、その言葉を真に受けて、特に何も気にしていませんでした。そこからAさんへのいじめは止まることを知らず、しばらくして、学校に来る回数が減っていき、秋の終わり頃にはAさんの姿を見ることはなくなりました。後から学年主任の先生からお話があり、学校に来れなくなった原因がいじめであること、Aさんはベッドから起き上がるのも辛くなり、食事も十分に取れず、学校のことを考えると吐き気を催してしまう事を知りました。

もう遅かった。取り返しのつかないことをした。

そこで私は初めて、ことの重大さを実感しました。私たち一人ひとりの考えの甘さが、Aさんの人生をめちゃくちゃにしてしまったのです。あの時、先生に相談していたら、もっとしつこく心配していたら未来はかわったんじゃないかと後悔が募りました。このことを思い出すと、今でも涙が止まりません。私は、Aさんの言葉に安心して何も気にしなくなったあの時から、いじめの「傍観者」になっていました。きっとあの頃の私は、先生に相談してバレたら、自分が次のターゲットになるかもしれないという不安の中で、本人の口から出た「大丈夫」に安堵し、身を委ねてしまって傷んだと思います。

いじめを止められなかった私の訴えに説得力は感じないかもしれません。しかしどうしても皆さんに伝えたいことが一つだけ。「その人の人権を侵すのは他人であり、それを防ぐことができるのも他人である。」ということです。私と同じ生徒の皆さん、いじめというものが最も身近であり、いち早く気付くことができるのは私たちです。考えすぎ、心配し過ぎ、それくらいがちょうど良いです。あなたの勇気ある行動が一人の大切な命を救うかもしれません。逆も然りです。あなたの一度の過ちが一人のかけがえのない命をうばうかもしれません。どうか手遅れになる前に、自分のクラスは本当に大丈夫か立ち止まって考えてみてください。そして先生方。私の学校はチーム担任制と言って、担任の先生が変わります。これには、生徒の主体性を育む目的があると共に先生の負担を減らすそうです。しかし、一つのクラスを集中して見れないため、いじめがあっても気付きにくいという欠点があるのでは、と思います。これまでは、先生が気付いて直接声をかけ、未然に防ぐこともできました。しかし今回みたいに誰か気が付いて声をかける人がいなかったら、孤独を感じてとても心細いと思

います。もちろん私たちが動くべきなのですが、もっと相談しやすい環境を作ってほしいです。相談できる機会を増やしてほしいです。生徒に任せっきりにしないでください。生徒の主体性よりも誰もが安心して生活できるほうが学校のあるべき姿なのではないでしょうか。

Aさんはクラスが変わってから、体育祭や卒業アルバム撮影に来てくれたり、最近では一緒に修学旅行に行くこともできました。しかし、歩行に支援が必要で、みんなと同じように活動することはできませんでした。私たちは人としてはいけないことをしました。あと一歩間違えれば命も奪っていたかもしれません。いじめを防ぐということは、互いを認め、尊重し合えるということであり、それは、最近よく聞く多様性というものにもつながってくると思います。「いじめといじりの境界線は？」「人権ってなに？」そんな難しいことを考える前に、今目の前にいる人のことを大切にすることで、自然と誰かの人権侵害を防ぐことができるはずです。

言葉の力

中島中学校 二年　小島　心陽

みなさんは、いじりについて一度でも深く考えたことはありますか。私のクラスでは、「また遅刻？」「本当に不器用なんだね」といった言葉が飛び交い、笑い声が起こります。また、テレビ番組でも誰かの失敗や容姿をからかい、笑いに変える光景をよく目にします。

かつては私も、仲がいい証拠、場を盛り上げるためだと思い、深く考えずに周りと一緒に笑っていました。

しかしふとした時に、疑問が湧いてきました。「いじられている人って、本当に心から楽しんでいるのだろうか。笑顔の裏には誰にも言えない傷や痛みがあるのではないか。」と。「いじり」とは、言葉という鋭い刃物を、「笑い」で包み込んで隠しているだけなのではないかと考えました。私はこの身近な光景から、改めて「いじり」と「いじめ」の境界線について深く考えてみたいと思うようになりました。

私自身も、クラスで起きていたいじりの光景を、周りと一緒に笑って見ていた経験があります。私のクラスには、みんなから好かれている、いわゆる「いじられ役」の男の子がいます。その子が何か間違いをしたら、周囲から笑いが起こり、私も「それがお決まりのノリ」だと思って、一緒に笑っていました。その場の空気が、とても盛り上がって見えたからです。その子はなぜ自分が笑われているのか分かっていない様子でした。

それを見て私は、激しい罪悪感を覚えました。一生懸命したことをからかわれたら、自分だっていやな気持ちになるし、それを笑うことは決して許されないと思ったからです。私たちが「楽しいノリ」だと思って共有していた笑いは、相手の心を傷つけて成り立っているということに気が付きました。

この経験を通じて私は、人権の大切さに気付かされました。人権とは、「誰もが自分らしく幸せに生きる権利」であり、決して侵されてはいけないものです。しかし「いじり」という行為は、相手の失敗やコンプレックスをみんなの前でネタにすることで、相手の自分らしく生きる権利を踏みにじっています。

さらに恐ろしいのは、その場にいる全員が笑顔であるため、誰もそれが「人権侵害」だと気づかない点です。クラスの中にある「ここで怒ったら空気が悪くなる」「一緒に笑わなければ仲間外れにされるかもしれない」という無言の圧力が、いじられている人をさらに追い詰めていきます。傷ついている人本人が「やめて」と言えない状況を作り出している時点で、明確な「いじめ」さらには「人権侵害」に発展していくと私は確信しました。

では私たちは、どのように行動を改善すべきでしょうか。まず私自身が「無自覚な加害者」にならないように二つの決意をしました。

一つ目は、クラスでのいじりの光景を目撃した時、周りに流されず、一緒に笑うことを絶対にやめることです。自

分が笑わないというわずかな行動が、残酷な空気を変える第一歩になることを信じています。

二つ目は、違和感を覚えたら「それは言ったらいけないんじゃないかな」と穏やかに、しかしはっきりと周囲に伝える勇気を持つことです。誰もが傷つかないのが本物のユーモアであり、誰かを犠牲にする笑いではなく、全員が心から笑顔になれる会話のはずです。私たちの発言は、相手を包み込む毛布になることもあれば、相手を突き刺す刃物になることもあります。言葉の重みを理解し、自分の発言が誰かを追い詰めていないか、立ち止まって考えなおす姿勢を大事にしていきたいです。

「いじり」というのは、私たちの生活に溶け込んでいるからこそ、その危険性を見逃しやすいです。しかし、「これくらい大丈夫だろう」と考えてしまう事が、最も恐ろしい人権侵害への入り口です。私は、誰も無理して笑うことのない、お互いをありのまま尊重できる社会を作っていきたいと考えています。そのためには、一人一人の心の中にある小さな違和感や、友達の曇った表情を見逃さない「心のアンテナ」を働かせることが必要です。

人権を守ることは、授業の中の振り返りだけで終わってはいけません。人を救うということは、人の傷に寄り添う小さな優しさの積み重ねの先にあると思っています。

今日から言葉の刃物を手放して、自分らしく安心して生活できるクラスを私の周りから築いていきます。

言葉の葉と向き合う

中島中学校　三年　　西脇　聖菜

「あの子って、なんかウザくない？」このような悪口や陰口を聞いたり、口にしたりしたことはありませんか？もしこのような言葉を周りの人が言っていたとしたら、あなたは「これはいじめだ」と思いますか？おそらく、「はい」と答える人のほうが多いと思います。ですが、「悪口を一度も口にしたことがありません。」とはっきり言える人は少ないのではないでしょうか。

私は以前、周りの人が誰かに対して「キモい」と陰で言っているのを聞いたことがあります。

当時の私は、周りの人がそのようなことを言っていても全く気になりませんでした。それは、私に関係がないからです。私自身の悪口ではないし、言われている相手が特別親しい人でもなかったからです。それに、本当に相手を嫌って言っているのではなく、冗談交じりの軽いノリのように思えたからです。

本当のことを正直に言えば、私自身もそのような言葉を口にしたことがあります。だからこそ自分を正当化するためにも、心のどこかで「いけないことだ」とわかっていても、許してしまっていたのかもしれません。

社会で生きる中で、私たちはたくさんの人と出会い、関わり合って生活をしています。「全員が仲良く過ごせる」というのが理想ですが、現実はそうもいきません。自分と合わない人もいるでしょうし、苦手だと感じることもあるはずです。そうした人に対する負の感情が表に出て形になったとき、初めて「いじめ」になると私は考えます。また、誰かを攻撃することで自分が優位に立ったと錯覚し、愉悦に浸る人もいるかもしれません。だからこそ、人間が開かれた集団で過ごす以上、いじめを完全に無くすことは難しいのだと思います。

そこで、私はいじめを「減らす」という視点で考えてみました。私が過去に悪口を言ってしまった理由を考えると、相手を傷つけている自覚が薄かったからだと気づきました。対象の相手が目の前にいるわけではなく、ただ自分のモヤモヤした思いを吐き出したくて友達の前で言っていたからです。しかし、陰でこそこそと言うのは直接言うよりも陰湿であり、決して許されることではないと後になって反省しました。いじめを減らすには、本人の気づかぬうちに相手を傷つけてしまう機会を減らす必要があります。

もし誰かを「この人苦手だな」「少し嫌いかも」と思ってしまうこと自体は、悪いことではありません。何をどう思うかは自由であり、心の中の感情まで縛られるべきではないからです。しかし、それを「言葉」として外に出してしまうと、一瞬で凶器となり、相手の心に一生残る深い傷を負わせます。だからこそ、ネガティブな感情は言葉にせず、心の中に留めておくことがいじめを減らす一つの方法だと考えます。

また、どうしても感情を吐き出したいときには、「キモい」「ウザい」といった鋭い言葉ではなく、「少し苦手なん

だよね」「私とは考えが合わないかも」と柔らかい表現に言い換える工夫もできます。そうすることで、誰かを深く傷つけるリスクを減らせます。

私はこれから、こうしたことを意識して人と関わっていきたいです。世界中から対立を無くすのは大きな課題ですが、まずは自分の周りだけでも、誰もが過ごしやすい環境を作っていきたいと考えています。

自分の自由や権利が認められているのと同じように、他者にも傷つけられずに生きる権利があります。他人の人権や尊厳を軽視することは、結果として誰もが生きづらい社会を作り、自分自身を苦しめることにもつながります。もし「あの時、誰かを傷つけていたかもしれない」という心当たりが少しでもあるなら、これを機に自分の心と向き合い、少しだけ相手の立場に立った発言をしてみませんか？その一歩がきっと良い人間関係と穏やかな社会を築くきっかけになるはずです。

人権ボッチャ

桑原学園　九年　　吉川　紅羽

私は、人権ボッチャの授業を通して、人権について大切なことを学びました。授業を受けるまでは、「ボッチャは障がいのある人だけが行うスポーツ」というイメージを持っていました。パラリンピックの競技であることは知っていましたが、自分とは関係のないものだと思っていました。そのため、人権ボッチャと聞いても、どのようなことを学ぶのか想像できず、ただボッチャを体験する授業なのだと思っていました。

授業では、実際に障がいのある方と一緒にボッチャをしました。最初はとても緊張していました。どのように話しかければよいのか、どのように接すれば失礼にならないのか分からず、自分から積極的に関わることができませんでした。相手に気を遣いすぎてしまい、ただ見ているだけの時間もありました。気づくと、何か嫌な思いをさせてしまっていないかなどの不安が自分の中でいっぱいになっていました。

しかし、一緒にボッチャをしてみると、その不安は少しずつなくなっていきました。ボールが目標に近づくとみんなで喜び、うまくいかなかったときは励まし合いながら楽しむことができました。障がいのあるなし関係なく、同じチームの仲間として一緒に作戦を考えたり、応援したりする時間はとても楽しかったです。私は、それまで「障がいがある人とは特別な接し方をしなければならない」と思い込んでいました。ところが、一緒に過ごす中で、その考えは少しずつ変わっていきました。

この経験を通して私が学んだことは、「相手を特別視するのではなく、一人の人として尊重すること」が大切だということです。もちろん、困っている時、手助けをすることは必要です。しかし、必要以上に気を遣ったり、遠慮したりすることが相手のためになるとは限りません。相手の気持ちを考えながら、自然に接することが本当の思いやりなのではないかと感じました。また、人は誰でもそれぞれ違いを持っています。障がいがあるかどうかだけで人を判断するのではなく、その人自身を知ろうとすることも大切だと思いました。私自身、授業を受ける前は「障がいのある人」という言葉だけで相手を見てしまっていた部分があったと思います。そうした中で、その人には好きなことや得意なことがあり、私たちと同じように笑ったり楽しんだりする一人の人なのだと実感しました。この経験があったからこそ、自分の思い込みや偏見で物事を決めつけてしまうことは知らないうちに人を傷つけてしまっていることがあることに気付くことができました。

これからは、人権や障がいについて正しく理解することを大切にしたいです。そして、困っている人がいたら相手の気持ちを考えながら行動し、自分から積極的に関わっていきたいと思います。また、障がいの有無だけでなく、性別や年齢、国籍など、どのような違いがあっても互いを認め合い、尊重する姿勢を忘れないようにしたいです。

人権ボッチャは、ただのスポーツではありませんでした。人と人との違いを受け入れ、相手を理解しようとすることの大切さを教えてくれた貴重な時間でした。この経験をこれからの学校生活や日常生活に生かし、誰もが安心して過ごせる社会づくりに向けて、自分にできることを少しずつ試していきたいと思います。

羽島市市民協働部
生涯学習課
羽島市竹鼻町 55 番地
TEL 058(392)1111
令和 8 年 11 月